

令和7年度  
インクルーシブな学校運営モデル事業  
中間成果報告会

福井県教育庁高校教育課 特別支援教育室



# 発表内容

- 1 本事業の目的
- 2 学校運営連携校
- 3 モデルとなる児童生徒  
～居住地校交流ver.・学校間交流ver.～
- 4 カリキュラム・マネージャー
- 5 連携協議会
- 6 「共同学習」の側面を発展させた柔軟で  
新しい授業の在り方
- 7 現行の教員配置にこだわらない専門性を  
高めた授業実施のための体制構築を目指  
すために
- 8 本事業における成果・課題

# 1 本事業の目的

## 【本県における事業開始前の課題】

- ・居住地校交流を中心にした「交流及び共同学習」は、年間1～2回の頻度で継続的に実施してきたが、「交流」の側面が強く「**共同学習**」の側面の充実に課題があった。
- ・イベント的な交流が多く、特別支援学校および小中学校の児童生徒双方にとって、**ともに学ぶという意識**をもつことが難しかった。
- ・通常学級における**特別支援教育の視点を取り入れた授業づくり**を、一層充実する必要がある。

## 【本事業を通して達成を目指す目標】

### ①「共同学習」の側面を発展させた柔軟で新しい授業の在り方の研究

- ・知的障がい特別支援学校および小中学校の児童生徒がともに学習する中で、それぞれの**個別最適な学びと協働的な学びを保障**する授業の在り方を研究する。
- ・カリキュラム・マネージャーを中心に、特別支援学校の教育課程と小学校等の**教育課程をコーディネート**し、全ての児童生徒が学習内容を理解し、学習活動に参加している実感・達成感を味わえる**授業を企画・実践**する。

### ②「共同学習」の側面を発展させた授業実施のための体制構築の在り方の検討

- ・一人一人の教育的ニーズに応じた学びの場を大切にしながら、教育課程を柔軟かつ弾力的に運用したり、指導体制を工夫していけるような**体制づくりを検討**する。

# 2 学校運営連携校

## 【特別支援学校】

### ★県立清水特別支援学校(小・中学部)

(児童生徒数)

小学部:15名、中学部:6名、高等部:7名

(障害種) 知的障がい

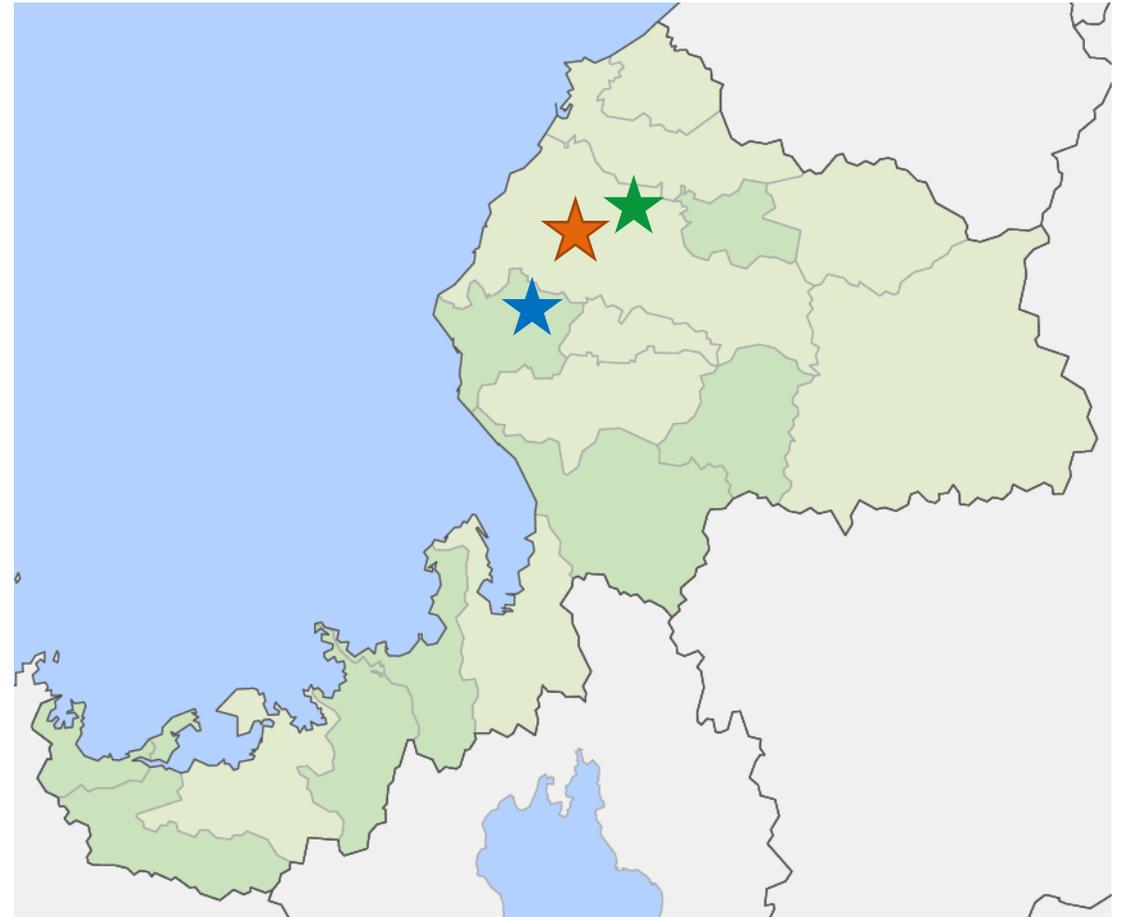
## 【小中学校】

### ★越前町立朝日小学校

(児童数) 361名

### ★福井市清水中学校

(生徒数) 220名



# 3-1 モデルとなる児童生徒 ～居住地校交流ver.～

## 県立清水特別支援学校

- ・小学部 A児  
(R6 : 4年、R7 : 5年)
- ・小学部 B児  
(R6 : 5年、R7 : 6年)

## 越前町立朝日小学校

- ・R6:小学4年生
- ・R7:小学5年生  
(各2学級)
- ・R6:小学5年生
- ・R7:小学6年生  
(各2学級)

# 3-2モデルとなる児童生徒 ～学校間交流ver.～

## 県立清水特別支援学校

R6：中学部1年

R7：中学部1年・2年



## 福井市清水中学校

美術部

(不登校傾向があり、部活動のみ出席  
できている生徒も参加)



# 4カリキュラム・マネージャー

---

## 【配置人数】

・1名

## 【主な経歴】

・県立特別支援学校長、福井県特別支援教育センター指導主事、日本リハビリテーション心理学会スーパーバイザー、中学校・高等学校スクールカウンセラー

## 【本事業における役割】

- ・交流及び共同学習の連絡・調整
- ・**学校間の教育課程をコーディネート**
- ・授業後や担当者会・連携協議会等での指導・助言

# 5 連携協議会

---

## 【構成人数】

・14名

## 【開催回数】

・3回

## 【構成メンバー】

・運営連携校管理職、カリキュラム・マネージャー、**大学教授**、保護者（特別支援学校代表・**小学校代表**）、美術専門家、公民館長、該当市町教育委員会、県高校教育課

## 【連携協議会において検討・議論した主な内容】

- ・児童生徒同士の関わり方や変容
- ・学習内容や教材の提示の仕方など
- ・地域から見る子どもたちの学び

# 6 共同学習の側面を発展させた 柔軟で新しい授業の在り方

## 【共同学習の授業設計の流れ ～カリキュラム・マネージャー提示～】

- ① 交流及び共同学習における単元の設定（※前年度末、年間指導計画をもとに決定）
- ② **特支校から「学習のねらい」と「学習内容」の提示**（※個別指導計画をもとに提示）
- ③ 小学校から「学習のねらい」の提示
- ④ 小学校から「学習活動」の提案（ねらいを受けて）
- ⑤ 双方による「学習のねらい」の調整
- ⑥ 双方による「学習活動」の調整
- ⑦ 双方による全体的学習活動の展開の調整・決定

重要

# 【事業1年目】交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の在り方の検討

## 交流及び共同学習の発展の方向性・ねらい

- ・学校間において教科の指導内容等のすり合わせを行い、教育課程の柔軟な編成を検討し、連続した学びを保障する。
- ・活動を共にするだけでなく、障がいのない児童たちが障がいのある児童たちに対してどのような声掛けや提示の仕方等をすれば伝わるのか、また楽しめるのかを主体的に児童たちが考え授業づくりに参画していく。

## 実施内容

①		②	
対象学年:	清水特別支援学校小学部4年と朝日小学校4年	対象学年:	清水特別支援学校小学部5年と朝日小学校5年
回数・教科:	計8回(音楽3回、体育3回、総合2回)	回数・教科:	計9回(音楽2回、体育3回、家庭科1回、図工1回、総合2回)
主な内容:	○音楽:手話を交えた歌唱 ○体育:キックベース	主な内容:	○音楽:打楽器を使った活動 ○体育:高跳び ○図工:絵の具を使って

## 指導内容・指導方法の工夫

- 特別支援学校で使用している教材・教具の活用や環境の設定を取り入れる
- ・音楽で、電子黒板に歌詞や活動の流れを映し、どの児童にとっても視覚的に分かりやすく提示。
- ・特別支援学校の児童に馴染みのある曲を用いて、簡単な手話を導入。
- ・身近な生活用品を使用して作成した筆を使用し、表現の幅の拡大。
- ・グループ活動を取り入れ、少人数で関わる時間を設定。



## 交流及び共同学習の成果

- 児童の変容
- ・小学校のMTの一斉指導の声掛けのみでトライアングルのリズム打ちができた。
- ・簡単な手話を使って、特別支援学校の児童への働き掛けが見られた。
- ・特別支援学校の教材を共有したことにより、小学校児童の活動の幅が拡大した。
- 両校でのMTとSTの連携
- ・STが関わりのロールモデルとなり、小学校児童が声掛けなど工夫するようになった。



## 【事業2年目】「共同学習」の側面を發展させた柔軟で新しい授業の在り方の検討

### 交流及び共同学習の發展の方向性・ねらい

- ・小中学校の児童生徒と知的障害特別支援学校の児童生徒が共に授業を行う中で、それぞれの個別最適な学びと協働的な学びを保障する授業の在り方を研究する。
- ・カリキュラム・マネージャーを中心に、特別支援学校と小中学校との教育課程の違いを超えた授業を企画・実践する。

### 実施内容

①		②	
対象学年:	清水特別支援学校小学部5年と朝日小学校5年	対象学年:	清水特別支援学校小学部6年と朝日小学校6年
回数・教科:	計5回(体育2回、音楽1回、特別活動1回、書写・生単1回)	回数・教科:	計4回(図工1回、体育2回、図工・生単1回)
主な内容:	○体育:走・跳の運動「走り幅跳び」 ○音楽:日本の音楽に親しもう ○書写:書初め(鑑賞)	主な内容:	○図工:墨と水から広がる世界 ○体育:ティーボール ○図工:版画(鑑賞)

### 指導内容・指導方法の工夫

- 学習指導要領の目標、内容を踏まえた学習活動の変更や調整
- ・**小学5年の体育・音楽、小学6年の図工・体育の計4単元**において、実践的研究に取り組むことができた(※詳細は別シート参照)。
- 共同学習を実践する上で、有効な手立てや配慮の検討
- ・グループ学習、動作化が有効であった。

### 交流及び共同学習の成果

- 児童の変容
- ・周りの児童の動きと、わかりやすい状況設定との両輪で、主体的な学びにつながった。
- ・手順カードは、見通しをもつために有効であったが、小学生と特支校の児童間に「指示する、される関係」をつくってしまう場面もあった。今後は、「もっとやりたいね。楽しいね。」など共感的、叙述的なコミュニケーションの部分を見童間でどのように育てていくかについても、考えていきたい。

# 小学5学年体育科 走・跳の運動「走り幅跳び」

## 【朝日小学校（8時間構成）】

### ●単元を貫く学習課題

「一人一人に合った練習で、自分や仲間の記録を向上させよう！」

### ●学びのゴールの姿

「自分や仲間の課題にあった練習により、記録を向上させることができる。」

### ◎本時の目標（4/8時間）

- ・ 仲間の考えや取り組みを認めながら、走り幅跳びに繋がる運動に積極的に取り組もうとする。



## 【清水特別支援学校（6時間構成）】

### ◎本時の目標（5年A児 5/6時間）

- ・ 基本的な体づくり運動に慣れ、その楽しさや感じたことを表現する。  
（体育A2段階イ）
- ・ 簡単な決まりを守り、友達とともに安全に楽しく、基本的な体づくり運動をしようとする。（体育A2段階ウ）
- ・ 教師と一緒に走ったり跳んだりして楽しく体を動かす。（体育C1段階ア）

# 特別支援学校、小学校それぞれによる

## 学習のねらいの調整・学習のねらいの達成のための学習活動の調整

朝日小学校		清水特別支援学校		
①を習得するための学習活動	①調整前に予定していた学習内容	学習内容	学習活動	学習内容
<p>(1) 助走の練習</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・リズムカルな助走を意識するために、横にマーカーを置いて3歩助走、5歩助走、7歩助走、9歩助走で助走する。</li> </ul> <p>(2) 踏み切り、着地の課題に気づくように記録を測定する。</p>	<p>・走り幅跳びの一連の動きを理解し、リズムカルな助走から踏み切って遠くへ跳ぶ。</p>	<p>A'</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・リズムカルに走る。</li> </ul>	<p>A</p> <p>「ミニハードルで連続ジャンプ」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ミニハードルを使って連続的に走り越える。</li> </ul>	<p>A''</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ミニハードルを跨ぎながら歩く。</li> <li>・ミニハードルをジャンプして越える。</li> </ul>
		<p>B'</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・踏み切って上にジャンプする。</li> </ul>	<p>B</p> <p>「踏み切りタンバリン」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・吊るされているタンバリンを走って行きジャンプしてタッチする。</li> </ul>	<p>B''</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・タンバリンまで走ったり歩いたりする。</li> <li>・その場でジャンプする。</li> </ul>
		<p>C'</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・おへそを前に出すようにして跳び、「ん」路の字の姿勢になるようにして着地する。</li> </ul>	<p>C</p> <p>「跳び箱から立ち幅跳び」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・跳び箱を使って立ち幅跳びをする。</li> </ul>	<p>C''</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・マットに飛び降りる。</li> </ul>
		<p>D'</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・A' B' C' の一連の動きを3歩(ト・ト・トン)、5歩(トン・トン・ト・ト・トン)で連続的に行う。</li> </ul>	<p>D</p> <p>「リズム走り幅跳び」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・マットまでリズムカルに助走し跳ぶ。</li> </ul>	<p>D''</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・マットまで走ったり歩いたりする。</li> <li>・マットに跳ぶ。</li> </ul>

# 授業の流れ

- ① ラジオ体操
- ② ダッシュ
- ③ **サーキット練習**
- ④ やりたい場所で練習
- ⑤ ふりかえり

全体への提示

## 授業設計の流れ

- ⑥ 双方による「学習活動」の調整
- ⑦ 双方による全体的学習活動の展開の調整・決定

③ **サーキット練習**

A: ミニハードルで連続ジャンプ

B: ふみ切りタンバリン

C: とび箱から立ち幅とび

D: リズム走り幅とび

④ やりたい場所で練習

⑤ ふりかえり

あいさつ	
ラジオたいそう	
はしる	
サーキットかつどう	
ふりかえり	
はっぴょう	
あいさつ	

A児への提示

# カリキュラム・マネージャーの 指導助言を中心とした授業後の検証①

## 【5年体育：走・跳の運動「走り幅跳び」】

### □状況設定 □STの動き

- ・ A児（特支校）は、4つのコーナーの内2つのコーナー（踏み切りタンバリン・跳び箱から立ち幅跳び）で学習が成立した。本人に何をすればよいかをわかりやすく伝えていた状況設定が、有効だった。
- ・ 授業の一瞬一瞬には、「交流」と「共同学習」の両方の側面が一体としてあるため、STには、一方の側面に偏りすぎないように授業の流れを見ながら調整する役割が求められる。

# カリキュラム・マネージャーの 指導助言を中心とした授業後の検証②

## 【5年音楽：日本の音楽に親しもう】

### □動作化 □グループ学習

- ・音楽の特徴を感じ取りながら日本の民謡を聴き比べる学習に、①動作化による学習、②グループ学習を取り入れたことが、共同学習を進める上で有効な手立てとなった。
- ・「ソーラン節」と「かりぼし切り歌」の曲に合わせ、網に見立てたロープの輪を引き合う動作化を小グループで行った。ロープが引きやすかったり、引きにくかったりすることから、拍にのったりリズムと拍のない自由なリズムとを身体全体で感じ取りやすくさせていた。

# カリキュラム・マネージャーの 指導助言を中心とした授業後の検証③

## 【6年図工：墨と水から広がる世界】

### □導入の工夫 □両校での共同学習の合わせ方

- ・ B児（特支校）の個別指導計画をもとに検討した結果、本単元は学習内容の調整を必要とせず、学習活動の工夫等の配慮も多くを必要としない単元であった。
- ・ 学習活動の導入部分に工夫ができた。授業冒頭に、B児（特支校）が行った筆やローラー、スポンジに墨をつけて描く活動や、墨流しの活動を動画で紹介した。
- ・ 特別支援学校の教員がS Tとして、グループの児童の指導などでB児側から離れる時間があった時、児童同士の主体的な「交流」が生まれた。交流場面では健康・安全上仕方がない場合を除いて、少し離れて見守る方が交流は生まれることを、児童の姿からみとることができた。

# カリキュラム・マネージャーの 指導助言を中心とした授業後の検証④

## 【6年体育：ティーボール】

### □教具の工夫 □ルールの変更

- ・ 共同学習における「ティーボール」のねらいとして、①「ボールをよく見てバットで打つ」、②「簡単なルールを守ってゲームに参加する」を設定した。
- ・ ②「簡単なルールを守ってゲームに参加する」の達成に向けて、ルールを「バット(ラケット)をカラーコーンに入れる」に変更した。
- ・ 小学生が打ったときのボールの勢いや、打って走る勢いに圧倒されたことが要因で、B児（特支校）の動機付けがやや弱まった。

# 【事業1年目】交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の在り方の検討

## 交流及び共同学習の発展の方向性・ねらい

- ・ 特別支援学校と中学校生徒が協働で作品を制作し、地域での展示会を企画運営するなど、地域に発信する教育を展開する。
- ・ 特別支援学校の生徒からも感性を学び合うことでの障がい理解を推進する。

## 実施内容

対象学年:	清水特別支援学校中学部と清水中学校美術部
回数・教科:	計3回(出前授業1回、美術2回)
主な内容:	出前授業:理解啓発授業 美術:粘土を使った作品作り

## 指導内容・指導方法の工夫

### ○題材や環境の工夫

- ・新しい環境での活動に不安を感じる生徒に配慮し、取り組みやすい題材を用意するだけでなく、いろいろな人との関わり方や、粘土の造形活動がスムーズにいく支援の仕方等を検討。
- ・初めての活動場所で、教材教具の置き場所がわかりやすいように配置。

### ○出前授業

- ・中学校の生徒や教員に特別支援学校の生徒の表現の仕方について説明。

## 交流及び共同学習の成果

### ○生徒の変容

- ・コミュニケーションを苦手とする生徒が集団活動参加することができた。
- ・中学校の生徒が事前に相手校の生徒について知り、自然な関わり方をしたことで、特別支援学校の生徒が落ち着いて活動に取り組めた。



# 【事業2年目】「共同学習」の側面を發展させた柔軟で新しい授業の在り方の検討

## 交流及び共同学習の發展の方向性・ねらい

- ・ 特別支援学校と中学校生徒が協働で作品を制作し、地域での展示会を企画運営するなど、地域に発信する教育を展開
- ・ 特別支援学校の生徒からも感性を学び合うことでの障がい理解の推進

## 実施内容

対象学年:	清水特別支援学校中学部と清水中学校美術部
回数・教科:	計3回(出前授業1回、美術2回)
主な内容:	出前授業:理解啓発授業 美術:和紙を使った作品作り

## 指導内容・指導方法の工夫

### ○出前授業による有効な教育的アプローチ

- ・ 「生徒たちの交流及び共同学習への関心を高め、期待感を膨らませる」目的を達成することができた。
- ・ 出前授業の展開の構成がよく練られており、交流について前向きな発言をするTさんを中心に対話的な授業が展開された。

### ○芸術・文化に専門的な知見・技術を有する指導員の活用

- ・ 芸術に優れた才能を有する生徒の発掘や、障がいのある生徒の芸術活動を推進するため、積極的な活用を図った。
- ・ 「福井市障がい者芸術文化祭2025 TEMPUS～天賦を、ひらく」にブース出展をすることができた。

## 交流及び共同学習の成果

### ○生徒の変容

- ・ 個々の発達段階に応じた協働的な取組により、生徒同士、教員同士の相互理解が事業1年目に比べ一層促進された。
- ・ コミュニケーションを苦手とする生徒(特支校)の、集団活動に参加できる頻度が増えた。
- ・ 不登校傾向にある生徒が、交流及び共同学習に参加することができた。
- ・ ペア活動が有効だったと思われるが、進んで中学生に話しかける特支校の生徒がいた。

## 7 現行の教員配置にこだわらない専門性を 高めた授業実施のための体制構築を目指すために

---

- 小学校でのチーム担任制の導入（※事業2年目より導入）
- 「インクルーシブ教育コーディネーター」の位置づけ  
（※小学校で新しく設置）
- スクールプランへの位置づけ
- 3校による合同研修会の実施
- 県特別支援学校教育研究大会での実践発表
- 両校の教員によるティーム・ティーチングの実施、検証

# チーム担任制が支える インクルーシブな教育の推進

## 役割分担



教員の負担軽減と  
精神的サポート

## 情報共有



多角的な指導・観察に  
よる授業の質の向上

## 対話の深まり



児童生徒理解によるいじめ、  
学級崩壊等の早期発見

# 8 本事業における成果・展望

---

## 【事業1年目から2年目にかけての変化】

### ○特支校の児童生徒

- ・ **本時のねらい**にせまる「共同学習」に取り組むことができた。
- ・ 周りの児童をモデルに、**学びに向かう力**が身についた。

### ○小中学校の児童生徒

- ・ **多様な参加の仕方や学び方**、その展開プロセスを理解することができた。
- ・ 共同学習の中で生じる思いのズレを受け止めながら、合意を創り出し、共有可能な活動や経験を創り出すことができた。

# 8 本事業における成果・展望

## 【事業1年目から2年目にかけての変化】

### ○担当教員

- ・校種を超えた児童生徒への働きかけが、積極的に行われるようになった。
- ・両校での話し合いのもと、共同学習の実現のために、子どもの方が発揮しやすい状況を作り出すことができた。

### ○保護者（アンケート自由記述より）

- ・障がいのある方を切り離すのではなく、お互いの存在を認識し、触れ合い関わっていくことが大切だと感じる。
- ・インクルーシブ教育推進事業はとても良い。偏見をなくすために小さいうちから話すことや体験することで「考え方」や「優しい心」を持てると思った。

# 8 本事業における成果・展望

## 【事業最終年度に向けての展望】

★モデル校の実践・成果を、県内全ての特別支援学校に拡大

- ①特別支援学校はモデル児童（生徒）を一人決め、その児童（生徒）の居住地である交流校（小中学校）との「共同学習」に、年間を通じて計画的に取り組む。
- ②「共同学習」の取組を通して、全ての児童生徒が共に学び合う環境を整備する。
- ③小学校、中学校、特別支援学校が、インクルーシブな教育システム構築にかかわる自校の強みや課題、めざすべき方向性を確認する。

御清聴ありがとうございました

